

☆この章は *Patterns of Anarchy*, ed by Leonard I. Krimerman & Lewis Perry, Anchor Books 1966. PP38-115 から訳出した。

☆彼女の意図は「わたしはわが陣営においても革命の概念が余りにもロマンチックなのを確信しました。資本主義が廃止され、ブルジョワジーが切除された後でも、奇蹟は期待できない。わたしはそう知ったので、同志達が理解を鮮明にする手助けにでもなればと思い……書いたのだと言う。」

☆エマの題は「ロシアにおけるわたしの二年」だったのが「……わたしの幻滅」と変えられ、ダブルデイ・ページ社によって廿四章分が出版された。残り分は別冊として *My Further Disillusionment in Russia* が一九二四年、ダブルデイ社から出たようである。この章は *Further* の方に掲げるもので総括的部分だろうと訳者は判断している。

裏切られた革命

I

ロシア革命の失敗について、ボルシェヴィキではない社会主義者の批評家達は、この革命がロシアで成功しなかった理由を、工業条件があつた国で、必須の最高頂に達していなかったからだと言張する。そして社会革命は、高度に発達した産業方式と、それに付随する社会的な敵対関係を有する諸国においてだけ可能だと教えたマルクスを指摘するのです。それ故、ロシア革命は社会革命ではなく、歴史的には、立憲的民主的路線に沿って居、この国が根本的に変革するのに必要な経済的成熟を遂げるには、産業の成長によって補完されなければならないとする。

かような教条的マルクシアンの視点は、一つの重要な要因を度外視している。しかもその要因こそ産業の要因より社会革命の可能性と成功にとって、恐らく決定的なのです。それはあるきめられた時期における大衆心理です。例えば、なぜ米、フランス、ドイツでさえ社会革命は起きなかったのか。確しかこれらの諸国は、マルクスが最盛期と規定した工業的發展に到達していたのです。真理は、工業的發展と厳しい社会的明暗は、それだけでは新社会を産むとか、社会革命を呼びさすのに十分でないということです。ここで指摘した米、国およびその他諸国では、必要な社会的自覚、求められる大

衆心理が欠けているのです。それがなぜ社会革命が起きないかを説明します。

その点ロシアは、はるかに工業化され、「文明化」した諸国より利点をもっていた。ロシアがヨーロッパの隣邦に比べ、工業的に進んでいなかったのは本当です。しかし、ロシアの大衆心理は二月革命に鼓吹され、強化され、数ヶ月のうちに、民衆がへ全権力をソヴェトへとかへ土地は農民へ、工場は労働者へ」というような急進的の革命スローガンをかけける程、急速に成長したのです。

これらのスローガンの内容を決して低く評価してはいけません。大部分は民衆の本能的、半自覚的意志を表現したもののだが、それでもロシアの完全な社会、経済、産業の再編成を意味していたのです。

米国やヨーロッパでかような革命的合言葉を、実人生に解釈する用意のあつた国があるでしょうか？だがロシアでは、一九一七年六月七月にはこれらのスローガンが人気になり、一億五〇〇〇万人以上の産業、農業人口の構成員によつて、直接行動の形で熱心にまた活発にとりあげられたのです。それこそ、ロシア民衆が、社会革命にむけ「成熟」していたことの十分な証拠でした。

マルクシアンの意味での経済的「準備」についていえば、ロシアが顕著な農業国であることを忘れてはなりません。マルクスの断定は、革命への社会的適応性の第一歩としてあらゆる高度成長社会では、農民と農業人口の工業化を予測している。だが一九一七年のロシアでの事件は革命が工業化の過程を待ちきれずこれこそ重要ですが待つようにはできていないということです。マルクスの断定にかわりなく、ロシア農民は、地主を収用し、労働者は工場を占有しはじめたのです。この民衆行動が、それ自身の論理に従つて、マルクシアンの計算をすべてひっくりかえしてしまつた。スラブ人の心理は、社会民主的理論より強力なのを示したのである。

自由を求める熱烈な渴望を含んだその心理は、社会の全階級の中で、一世紀に亘る革命的煽動で培

養されたものです。ロシア民衆は幸運なことに、諸国のプロレタリアートのように「民主的」「自由とか自治による墮落や混乱でごまかされたり汚染されていなかった。ロシア人は、この意味において、自然單純で政治的陰謀、議會戦術、法的代用品に慣れていなかった。一方、正義と權利についての原始的感覚は、偽わりの文明の洗練さに分解されることなく、強力で活力があつた。ロシア人は自分が何を希望するか知つて居、それをもたらしのに「歴史的必然」を待たなかつた。革命は人生の事実であつて、議論のための単なる理論ではなかつたのです。

こうして、ロシアでは社会革命が、工業的に立遅れた国であるにかかわらず起きたのである。しかし革命を作りだすだけでは十分ではない。革命にとつて必要なのは、経済的社会的再編成を進め、拡張、発展させることです。革命のその段階では、個人的主導性と集団的努力を十分に働かせる必要がある。革命の展開と成功は、知的プロレタリアートと肉体的プロレタリアートの協働を基礎にした民衆の創造的才能を、広範に働かせることに依存している。すべての革命活動の動機は、特にその建設的方面では、共通の利益です。目的の共有と連帯の精神が、十月十一月革命の日々に、強大な波のうねりとなつて、ロシアを席捲しました。その熱狂の中に定着していたのは、全民衆の福祉を絶大とする考で、それが理知的にみちびかれるなら、山をも動かす程の力でした。さような有効な導きについての手段は手許にありました。都市と農村を架橋する網の目のように、ロシアを覆っていた労働組織と協同組合。更に、ソヴェトはロシア民衆の必要に應えるものとして簇出したのであり、また最後にはあげられるインテリゲンチアは、一世紀に亘る伝統で、ロシア解放運動に英雄的に献身したのを示しています。

けれど、そうした展開は、決してボルシェヴィキのプログラム内に留つていなかった。十月以後の

数ヶ月の間、民衆勢力の示現、民衆が革命をこれまでになく広範な各方面に持出すのをみて悩んだのです。共産党は政府の鞍に乗って強力になったと感じた瞬間から、民衆活動の範囲を制限しだしたのです。ボルシェヴィキの継続的活動のすべて、政策変更、妥協と後退、抑圧・迫害の方法、他の政治視点のすべてをテロにかけせん滅するやり方、これらはことごとく、**目的にあてた手段**、即ち国家権力を共産党の手中に保持することに他ならなかったのです。事実、ボルシェヴィキは（ロシアにおいて）この事を秘密にしなかった。共産党は、プロレタリアートの前衛である、独裁権は手中にある、と彼等は主張していました。不幸なことに、ボルシェヴィキは自分の主人―農民―がなくては立行かぬことを考えなかった。しかも農民を強制徴用、チエーカ（秘密警察）、大量射殺に付しても、ボルシェヴィキ体制の支持はとりつけられなかった。農民はレーニンの最良の計画、スケジュールを挫折させる岩になったのです。しかしレーニンは明敏な軽わざ師でしたから、僅かな余地でも上手に活用しました。新経済政策を時期よく導入し、ゆっくりだが確実に共産党の構築物を打倒する筈だった危機を乗り越えたのです。

II

「新経済政策」は多くの共産主義者にとって、驚きであり、衝撃でした。彼等は党が宣言していたことのすべてを―つまり共産主義自体の逆転をそこに認めたのです。レーニンとトロツキーが外国で安全に生活している間、旧体制の危険と迫害に直面した党の最も古いメンバーの幾人かは抗議して、憤激と失意のうちに党を去りました。指導者達はロックアウトを宣言した。彼等はすべての「疑わし

い」分子を党の階層から除去するよう指令したのです。独自の態度をとるとかこの新経済政策を革命の智慧の最後の言葉として受け入れない人びとが追放にあつた。その中には長年、献身的に働いた共産主義者が多勢いました。中にはその不正で野蛮な手段による急変に傷つき、自分達が掲げていたものの崩壊によって信念の基礎を揺がされ、自殺した人もあります。でもレーニンの新教義の円滑な船出は確保されなければならず、その教義は四年間の革命の廃虚の上に私有財産の神聖と凶暴な競争を樹立するものでした。

しかし、新経済政策に対する共産主義者の憤激は、レーニンへの反対者の側に、心情の混乱をひき起しただけでした。心情の混乱以外の何が、数多くの軽わざ師的レーニンの政治的妙技を認め、しかも、その論理的最高頂であるとは返りに憤激するでしょうか。献身的共産主義者の困惑は、革命の支援によって世界を救出するという共産主義国家の純潔な観念にすがりついていたからなのです。でも指導的な共産主義者の大部分は、決してさような幻想を抱きません。特にレーニンはそうでした。

わたしの最初の会見中に受けた印象では、レーニンは機敏な政治家で、自分が何をするのか、また目的を達成しないで中止する人ではなかった。彼の話を経験が聞き、著作を読んだ後、わたしはレーニンが革命に関心をもつのが少なく、共産主義は何か縁遠いものであるのを確信するようになった。集権化した政治国家こそレーニンの神であり、外のすべてはその供物でした。ある人は、レーニンがロシアを救うために革命を犠牲にしたと言う。しかしレーニンの政策は、革命と祖国の両方を喜んで供物にするのです。ロシアで残されたものに自分の政治意図を実現するためなら、少なくとも後者の一部をそうするのだと証明しています。

レーニンは歴史上、もっとも柔軟な政治家でした。彼は超過激革命家、妥協家、保守家と同時にな

ることができた。へすべての権力をソヴェトへ」というような強力な叫喚の波がロシアを席捲すると、レーニンはこの潮流を泳いだ。農民が土地を、労働者が工場を所有すると、レーニンはそうした直接法を認めただけでなく、更にすすみました。彼は有名な「泥棒から盗め」の標語を出し、さようなスローガンが民衆の心を混乱させ、革命的理想を言い難く傷つけたのです。これ迄、真の革命家で、社会的取用をある一群の個人から別の一群の個人への富の移管だと解釈した人は誰もいないのです。でもレーニンのスローガンは実にそう言っているのだ。見さかいのない無責任な襲撃、新ソヴェト官僚による先のブルジョワジーから奪った富の蓄積、罪と言え、以前の地位にしか過ぎない人びとに対して払われたごまかし、これらすべてはレーニンの「泥棒から盗め」のスローガンの結果でした。革命の後日談は、レーニンの妥協と自己のスローガンの裏切りから成る万華鏡です。

十月の日々からのボルシェヴィキの活動と方法は新経済政策に矛盾すると思われた。しかし実際は、その経済的表現の通り、強力な中央集権政府を国家資本主義に連結する鎖の役をしているのです。レーニンは明確なウジヨンと鉄の意志の持主です。彼はロシアでは同志をどう作るか、ロシアの外では彼の企図が社会主義であり、彼の方法が革命だと信じこませる仕方を知っていた。だから自分の仲間に輕蔑を覚えるとそれを相手の顔に投げつけるのはちゅうちょしなかった。馬鹿だけが、今のロシアで共産主義の可能性を信じている。これが新経済政策の反対者に対するレーニンの答えだった。

実のところ、レーニンは正しかった。給与について三三分類もあり、配給食料は差別され、ある人は特権をもち、大衆には無関心なのが共産主義だと考えない限り、ロシアにおいて真の共産主義は、決して企てられなかったのだ。革命の初期に、共産党が権力を掌握するのは比較的容易だった。すべての革命分子は、ボルシェヴィキの超革命的約束にまどわされ、その権力奪取に手を貸した。ひと度

国家を掌握した共産主義者は、追出しにかかった。最初がアナキストと左翼革命主義者、次いでメンシェヴィツキと右翼反対派、最後は、自分の意見を持ちたいと熱望するすべての人びとだった。ソヴェト、労働組合、それに協同組合等は——この三者こそ革命の希望を実現する要素であった——新国家の要求に従属するか破壊されてしまった。

ソヴェトは、一九〇五年の革命の中で初めて出現した。それらは短期だが重大な期間中に重要な役割を果たしたのです。革命はつづれたけど、ソヴェトの理念はロシア大衆の心と胸に根づきました。一九一七年二月、ロシアに輝いた夜明け、ソヴェトが復活し、極く短期間花咲きました。民衆にとってソヴェトは決して革命精神を矮小化したものではなかった。それどころか、革命はソヴェトを通してその最高のもの、自由な実際の表現を見出したのです。だからこそ、ソヴェトは全ロシアで自発的に急速に拡がったのです。ボルシェヴィキは、民衆的傾向の意味するものを自覚して、呼び声に参加した。しかしひと度、政府管理の任に就いた共産主義者達は、ソヴェトが国家の至上権を脅迫すると見たのです。それと同時に、彼等は、国内における自己の特権を、また外国では、ソヴェト方式の支援者を危くしないで、任意にソヴェトを破壊することはできなかった。そこで彼等はソヴェトの権力を序々に刈りこみ、遂に自己の要求に従属させてしまったのです。

ロシアの労働組合はずっと素直に骨抜きになった。人数と革命気質では、未だ子供時代だった。労働組合の義務に固執すると宣言したロシアの労働組織は物理的な背丈だけあって、心理的には幼児だったのだ。共産主義国家が労働組合の感傷的な看護婦になった。お返しにそれらの組織は国家の従僕になります。それはよろしい。だけど古めかしい学校でこそ、子供の精神はかせをはめられ、打ち砕かれる

のです。世界の何処の国に、ボルシェヴィキのロシアにおいてのような、労働者組織が国家の意志と指示に従うものがあるでしょう。

協同組合の運命も骨抜きを要したことがよく知られている。協同組合は都市と農村を結ぶ重要な紐帯だった。交換と分配の民衆的な成功した手段として、革命に貢献したこと、ロシアの再建に尽したのは計り知れません。ボルシェヴィキは、それらを政府機構の歯車に変え、有用性と効力を殺いでしまったのです。

III

共産党によって指導されたロシア革命が、どうして失敗したか、今や明瞭になった。国家の中に組織され、集権化された政治権力は、手中のあらゆる手段を用いてその維持に努めるのです。中央当局は民衆の活動を党の目的に一致する形態に整えるよう強制します。党の唯一の目的は、国家を強化し、経済、政治、社会活動のすべて、文化的表現のすべてさえ、専有することです。ところがあの革命は全く異った目標をもち、その本質は権威と中央集権の否定でした。それはプロレタリアの表現に適した分野を拡張、個人的また集団的努力の諸相を豊かにするよう闘ったのです。ロシア革命の目的と傾向は、支配的政党のそれとは真向かうから対立するものでした。

同じように、革命と国家の方法も対蹠的でした。前者は革命そのものの精神で鼓吹されていたのです。言わば、すべてに抑圧的、制約的諸勢力からの解放、即ち自由原理 *Libertarian Principles* による方法でした。他方、国家の方法は—すべての政府と同じくボルシェヴィキのそれも—強制に基づ

くもので、それはものごとの経過において、必ず組織的暴力、抑圧、テロリズムへと展開するのです。こうして二個の傾向が支配権を争った。ボルシェヴィキ国家対革命です。その闘争は死闘でした。二個の傾向は目的と方法において異なるのですから、調和的に作用しない。国家の勝利は、革命の敗北を意味するのです。

ロシア革命の失敗が、全くボルシェヴィキの性格に依ると総括するのは誤まりでしょう。根本的には、ボルシェヴィキの理念と方法の結果です。自由人と自由の熱望を窒息させた権威的精神、それに国家原理です。例え別な政党が、ロシアで政府を掌握したとしても、結果は本質的には同じだったでしょう。だがら革命を殺したのはボルシェヴィキであると同時に、ボルシェヴィキの理念なのです。それは修正されたとはいえ、マルクシズムでした。即ち狂信的政府主義なのだ。革命を破砕した底流にある支配力を、こう理解すれば、世界を動揺させたこの事件の真の教訓があきらかになる。ロシア革命は、権威主義に反対する自由原理の百年に亘る闘争を、小規模ながら反映しています。なぜならもし強制の原理に反対するものとして、自由の原理がより広く一般に受け入れられるのでなかったら、進歩とは何でしょうか？ ロシア革命は、反動—政府理念の一時的勝利による、ボルシェヴィキ国家—によって敗北させられた自由の一階段でした。

その勝利には幾つかの原因がある。だが主なのは、多くの著述家が主張しているような、ロシアの工業の後進性ではないのです。その原因は文化的なもので、これはロシア民衆に、近隣の悪づれた諸国民より利点を与えはしたが、また決定的不利をも与えたのです。ロシア人は、政治的議会的に悪づれていない意味で「文化的後進性」の国民でした。他方、実にその状態での彼等は、大声で叫び、汎山な約束をする党の奇蹟の力を素直に信じたり、政治ゲームに無経験なまま巻きこまれてしまった。

政府權力の信仰は、大衆が自分の首にかせをはめられたのを自覚する前に、ロシア民衆を共産党へ隷属させる働きをしたのです。

自由の原理は革命の最初の日々は強力で、自由な表現への要求がすべてを吸収していた。だが狂熱の最初の波が日常性の単調な生活へと退潮すると、自由の火を燃えたままにしておく確信が必要でした。その火を燃えあがらせておくことができたのは、この広大なロシアにおいても比較的僅かな人びとだけでした。――アナーキスト達です。その数は少なく、尽力は帝制下で全く抑圧され、実を結ぶひまもなかったのです。ロシア民衆は、ある程度、本能的にアナーキストですが、それでも本当の自由原理やそれを実人生に効果的に応用する点ではひどく未熟でした。多くのロシアアナーキスト達さえ、不幸なことに、一層重要な社会的集団的努力をする代りに、限ぎられたグループ活動とか個人的尽力のわなにとどまっていた。偏見をもたない未来の歴史家は、アナーキストがロシア革命で果たした役割――比較的少数者が期待以上の重要で実り多い役割――を承認するでしょう。にもかかわらず、わたしは正直に誠意をこめて言うのだが、もし彼等が民衆の解放された活力を、自由の基礎に基づく生活の再編成にむけ導くよう、より良く組織化され装備していたら、その実践的価値ははるかに巨大であつたろう。

しかしロシア革命におけるアナーキストの失敗は、申しあげた通り、決して自由理念の敗北を意味するのではないのです。そうではなくて、ロシア革命は、国家理念、国家社会主義のあらゆる表現――経済的、政治的、教育的――が全く救いようもなく挫折したのをはっきり示しているのです。全歴史の中で、これ程権威、政府、国家がその固有の静態的、反動的、特に結果において反革命的であることを明示した例はなかった。言はば革命の対蹠、アンチテーゼでした。

残されたのが真実です。進歩の全階梯を通じてそうであつたように、自由精神と方法だけが、より良く洗練された自由な生活への永遠の熱望を更に一歩進めさせるのです。革命としてよく知られた大きな社会的変動の中に応用してこそ、この傾向性は日常の進化過程においてと同じく有効です。権威の方法は、全歴史を通じて失敗でしたが、ロシア革命でもまた失敗したのです。これ迄のところ、人類の才能は、自由の原理の外みつけだすことはできなかった。人間は自由が秩序の母であつて、その娘ではないと言う時、実に最高の英知を表明したのです。あらゆる政治的教義と党派にかかわらず、専制と中央集権を強力に否定し、またすべての経済的、社会的、文化的価値の真実な再評価にむけ、決意をもって革命を働かせるのでなかったら、革命は本当にまた永続的に成功しないのです。政府の掌握が一政党から他党へ移るとか、プロレタリアのスローガンで独裁政治を隠すとか、旧階級の上に新興階級が専制を振うとか、何らかの政治状況の交代ではなく、すべての権威主義的原理の完全な逆転こそ革命に役立つのです。

経済分野だとこの変容は産業大衆の手で行なわれなければなりません。産業国家を選ぶかアナルコ・サンジカリズムを選ぶかは大衆によるのです。もし産業国家を選べば、新社会構造の建設的發展は、政治国家のそれと同じくらい脅かされる。それは新生活形態の成長にとって重荷になるでしょう。なぜならサンジカリズム（または産業主義）だけでは、解説者が言うように、自足しないからです。自由精神が労働者の経済組織に滲透して初めて、民衆の創造エネルギーが示現し、革命の諸事では自由な発議と民衆参加だけが、ロシアにおいて犯されかけた大失態を食い止めたのでした。例えば、ペトログラード（レニングラードの旧名）から僅か一〇〇ベルスター（一〇六・七キロ）しか離れていない地点での燃料さえあれば、この都市は寒さに苦しむことなく、それはペトログラードの労働者の経済組

が公共のためにその主導性を振えばできたことなのでした。またウクライナ地方の農民は、モスクワから配布の司令を待ちながら、カルコフやその他の工業地区の倉庫に眠っていた農機具さえ手に入っていれば、農耕を妨げられなくて済んだ筈でした。ボルシェヴィキの政府主義と中央集権の特長的なこうした事例は、欧米の労働者に、国家主義の破壊的效果を警告するに違いありません。

自由連合を通して表現された大衆の産業勢力アナルコ・サンジカリズムだけが経済生活を成功裡に組織化し、生産を進め得るのです。他方、産業体と調和して働く共同組合は、都市と農村の分配・交換メジャーとして機能し、同時に工業と農業に従事する大衆を結ぶ友愛のきづなになるのです。革命の強力な防護物として創出された相互扶助と奉仕の共通帯は、強制労働、赤軍またはテロよりはるかに有効でした。このやり方でこそ革命は、新社会形態の発展を早め、大衆によって偉大な業績を鼓吹する原動力となり得るのです。

しかし産業組織や共同組合だけが、社会生活の複雑な交錯の中のメディアではない。経済活動と密接していながら、文化諸力もそれ自体で作用する機能を持っています。ロシアでは、共産党国家が社会のすべての要求の唯一の調停者でした。その結果は：完全な文化的停滞とあらゆる創造活動を半身不随にしてみました。もし将来、こうした崩壊を避けなければ、文化諸力は経済的土壌に根を下ろしているにしても、独立した分野と表現の自由を確保しなければならぬ。有力な政党にべたつくのではなく、革命、知識、才能、とりわけ創造の推進力に貢献するのが、文化的仕事について、適応性の基準にならなければいけない。ロシアでは十月革命の発端から、インテリゲンチアと大衆の激烈な分離により、これがほとんど不能になった。この場合、最初の違反者は、インテリゲンチア、特に技術系知識人でした。ロシアでも他国と同じく、技術系知識人はブルジョワジーの上着のすそにかがりつ

いていました。この分子は、革命的諸事件の意味が理解できず、全般的サボタージュによって潮の流れにさからった。でもロシアには別種のインテリゲンチア―百年の光榮ある革命的過去をもった人びとがいた。インテリゲンチアのこの部分は、新しい独裁権を無条件に受け入れはしたが、民衆を信頼していません。ボルシェヴィキの決定的誤りは、これら二分子の区別をしなかったことです。ボルシェヴィキはインテリゲンチアを一階級と見立て、サボタージュには全面的テロで対決し、ブルジョワの迫害より一層強力な憎悪をかきたてるキャンペーンを実施した。それがインテリゲンチアとプロレタリアートの間に深淵を作り、建設の仕事では障害になった。

この犯罪的大失態を演じた第一人者が、レーニンです。彼こそ、労働者はインテリゲンチアの支援や協働がなくても、産業を建設し、文化的仕事に従事できると労働者に信じさせる路線へ導くのは、重大な誤りだと指摘したのです。プロレタリアートは仕事について知識もなければ、訓練も受けていない、そこでインテリゲンチアが産業生活の方面に復帰しなければならなかった。しかし誤りを認めたとって、それでレーニンと彼の党がすぐ別の誤りを犯かさないう保障にはならない。技術系知識人は、体制への敵意の集積を付加するために呼び戻されたのでした。

労働者が飢えている間、技術者、工業専門家、機械技師等は高給と特権と最上の配給食料を受けました。彼等は国家の飽食した雇員で、大衆にとつては新しい奴隸使役人になったのです。民衆は長い間、筋骨だけが革命の成功にとつて必要であり、肉体労働のみが生産的だと間違つて教えられ、すべての知識人には反革命、投機師の烙印を押す憎悪のキャンペーンを吹きこまれていたから、軽蔑と不信をもつインテリゲンチアと交友を結ぶのは不可能でした。

反インテリゲンチアのプロレタリア的態度が流布したのは、不幸なことにロシアだけではないので

す。大衆の無知につけこむ煽動政治家がいる所ならどこでも、教育と文化はブルジョワの偏見で、労働者はインテリがいなくてもやって行け、労働者だけで社会は再建できると教えます。ロシア革命は、頭脳と筋肉の両方が、社会再建作業にとって欠きえないのを明らかにした。知識労働と肉体労働は、人間の器官においての頭と手のように、社会の身体では緊密に結ばれているのです。

知識人が、労働者から孤立した優越な一階級だと考えたがるのは、真実だとしても、至るところの社会状態は、インテリゲンチアの高踏的台座を急速に破壊しています。彼等は自分もまたプロレタリアートであって、肉体労働者よりはるかに経済上の主人に依存しているのを見せつけられています。肉体的プロレタリアートは、自分の特別な社会環境にもっと強く根づき、職業や生活様式はたやすく変えられないのです。それ故、労働者に、知識人の急速なプロレタリア化とそうやって出来たお互いの共通な紐帯を納得させるのが最重要です。もし西欧世界がロシアの教訓から利益を受けるとすれば、インテリゲンチアに対する大衆の盲目的敵意と煽情的な大衆擁護のへつらいをやめることでしよう。しかし、だからと言って労働者がすっかり知識分子に依存しなければならないとするのではない。そうではなくて、今こそ大衆は、革命の大事業に宛て、準備し装備する仕事が課されたのです。それぞれ自分達が、敬愛する諸国において、工業的社会的構造の複雑な機構を管理し、指導するのに必要な知識と技術的熟練を習得すべきです。だが、例えよくできても労働者は専門的文化的諸分子と協働する必要があるでしょう。同様に後者も、自己の本当の利益を実現するのは大衆の利益に合致することだと理解しなければなりません。ひと度、社会のこの二勢力が、一つの調和的な全体に混合できるのを学べば、ロシア革命の悲劇の様相は相当に解消するでしょう。人がへ以前教育を受けた」という

だけで銃殺されることはないでしょう。科学者、技術者、専門家、研究者、教育家、創造的芸術家等は、大工、機械工、その他とひとしく、集団的勢力の一部や部分となつて、革命を新社会の構築物の偉大な芸術品に形どるのです。憎悪でなく調和です。敵意でなく友愛です。銃殺じゃなく共感です。それこそインテリゲンチヤと共に労働者にとつて、偉大なロシア革命の崩壊が教える教訓です。すべての人は、相互扶助と自由な協働の価値を学ぶべきです。各自は自己の分野に独立してありながら、社会に貢献できる彼の最善のものと調和しているのです。この仕方においてだけ、生産労働、教育、文化の尽力は一層新らしく豊かな形で自己を表現します。ロシア革命によってわたしが教えられたのは、さような全包括的、活力のある道徳でした。

IV

前述でわたしは、なぜボルシェヴィキの原理、方法、戦術が失敗したのか、指摘しました。同じ原理、方法を他国で応用しても、たとえ最高度に工業の発展した国においてさえ、失敗するに違いないのです。更にわたしが明示したのは、ボルシェヴィキが失敗しただけでなく、マルクシズム自体が失敗したのだということでした。言わば、**国家理念、権威主義の原理**が、ロシア革命の経験によれば破産したことの証明です。これまで述べた事柄を要約すれば、国家に内在する傾向は、すべての社会活動を集中化し、制限し、専有化する。これに反して革命の本質は、生長し、拡がり、更により広大なサークルの中に流布する。別言すると国家は制度的静態的で、革命は流動的でダイナミックだ。この二傾向は両立せず、相互に破壊的である。国家理念がロシア革命を殺した。同じ結果は**自由の理念**が

一般化しない限り、他のすべての革命において起きる……とわたしは申しあげたい。さてもっとわたしは論を進めます。革命と等しく、すべての活力ある人類の進歩にあたって、致命的なのはボルシェヴィズム、マルクシズム、政府主義だけではない。ロシア革命の主な敗因は一層深いところにある。それは革命についての社会主義の概念の中にみとめられるのです。

革命についての有力でほとんど一般的な理念——特に社会主義者の理念は、それが社会状態の急激な変革であり、その過程で社会の一階級——労働者階級が別の階級——ブルジョワの上に支配するということです。それは全く純粹な物理的变化の概念であって、政治状況の交替と制度的再編を含むだけです。ブルジョワの独裁権が、ヘプロレタリアートの独裁権」に取って代られる、または「前衛」だとか共産党が取って代る。言わば、レーニンがロマノフ王朝の座を奪取し、内務省が人民委員のソヴェトに名称を改め、トロツキーが陸軍大臣に任命され、一労働者がモスクワの軍事管理委員長になるようなものです。即ちボルシェヴィキの革命概念を実務に翻訳すればそうなるのです。そして少し修正すれば、それが諸他の社会党派がもっている革命理念にもなるのです。

この概念は内在的に、致命的に誤りです。革命は実に激烈なプロセスです。けれどももしそれが独裁権の変更、名称や政治人間の交替に過ぎないのなら、ほとんど値打ちはありません。すべての革命が招来する闘争と犠牲、膨大な人命と文化的価値の損失に全く値しない。もしそのような革命がより大きい社会的福祉をもたらしたとして（ロシアではそうではなかった）支払った恐るべき代価にそぐわない。唯の改善だって、無血革命では導入されないのです。わたしの考える革命とは、その目的や意図は単に緩和するとか改善するということではありません。

わたしの意見では、あの革命の経験によって千倍も強化されたのですが、革命の偉大な任務とは、

社会革命のそれは、価値の根源的な価値変更 (transvaluation) です。社会だけでなく、人間の価値の価値変更なのです。特に人間のそれは、すべての社会的価値の基礎です。わたし達の制度と条件は、深く根づいた理念によって安泰です。その際、諸条件を変更し、同時に底流の理念と手つかずの価値を放置しておくのでは、表面的変革に過ぎず、永続的な本当の改善はもたらさない。それは実体ではなく形式だけの変更で、ロシアが悲劇的に証明したのはそれでした。

ロシア革命の大きな失敗と悲劇は、支配的な政治党派の指導の下で、革命に含まれる人間的、社会的価値に手をつけず、制度と条件だけを変更しようと試みたことでした。更に悪いのは、権力への狂熱によって、共産党国家は、革命が破壊しようとした当の理念と概念を強化したり深めさせたのです。最悪な反社会的性質のものすべてを支持し、勇気づけたばかりか、すでに芽生えた新しい革命的諸価値を組織的に破壊しました。社会の真の再生の基盤——正義と平等の感覚、自由と人間的友愛への愛好——を、共産党国家はせん滅に近く抑圧した。人間の本能的平等感覚は柔らかな感傷だと刻印され、人間の尊厳と自由は、ブルジョワの迷信、社会の再建にあたって重要な人生の神聖さは、非革命的または僅んど反革命だと非難されました。基本的諸価値のかような恐るべき錯倒は、それ自体の中に破壊の種子をはぐくむのです。革命が政治権力を確保する手段に過ぎなければ、すべての革命的諸価値が、社会主義国家の要請に従属しなければならぬのは当然です。実際、新らしく獲得した政府権力を、より以上に確保するため搾取したのです。「革命と人民の利益」の仮面を被った「国家理由」が行動だけでなく、感情さえ規制する唯一の基準になった。革命的動乱の必然的悲劇である暴力は、慣習として設置され、むしろ風習となって、また最強の「理想的」制度にまで昇格されたのです。事実ツノヴィエフは血腥いチエーカの首領ツツエルチンスキーを「革命の聖者」として聖列化したのでは

ないですか？ またペトログラードのチエーカの設立者で狂暴な首領ウリツキーには、国家が最高の榮譽を与えたのではなかったでしょう？

倫理的価値のかような錯倒は、素早く、共産党の有力なスローガンに結晶化されました。それが、**「目的は手段を正当化する」**というのです。過去においても、異端審問とジェスイット派はこの標語を採用し、すべての倫理をそれに従わせたのです。けれどそれがまたジェスイット派に復讐したように、ロシア革命においてもそうでした。このスローガンは、嘘、欺き、偽善、裏切り、おおびらなまた秘やかな殺人を惹き起こしたのです。社会心理の研究者には、この二運動―時間と理念において異なるジェスイット主義とボルシェヴィズムが、原理の発展過程で**全く同じ結果に到達した**こと**「目的は手段を正当化する」**は、興味深いでしょう。多くの瑣事は無視しても歴史的な類似性は、将来のすべての革命と人類の未来にとって貴重な教訓を含んでいます。目的と意図が重要で、方法と戦術は別であるとする信念程、大きな誤りはないのです。この觀念が、社会の再生に対する潜在的な脅威になっている。人類の経験は、方法と手段は究極の目的から区別され得ないのを教えた。活用する手段は、個人の習性と社会的実務を経て、究極の目標の一部または部分を構成する。つまりそうしたものが目的に影響し、修正を加え、遂には目的と手段が同化するのです。わたしはロシアに着いた日から、初めはうすうすと、それから自覚的に明瞭にそれを感じました。ロシア革命の偉大な示唆の目標が、支配的政治権力の行使する手段によって曇らされそれが一時的な手段なのか、究極の目的なのか区別できなくなったのです。心理的にまた社会的だと、手段が目的に影響し、改変するのは必然です。人間の全歴史は、手段から倫理的觀念を剥ぎとれば、墮落の深みへ陥るという教訓を絶えず証明している。ロシア革命に応用されたボルシェヴィズム思想の悲劇は、そこに在るのです。この教訓が無駄にな

らないことを！

革命を助長するのに活用される**手段**が、達成しようとする**目的**の精神と傾向に一致しない限り、革命は解放の要因として成功しない。革命は現存在の否定で、一が多を隷属させるのを含んだ、人間に対する人間の非人間性に宛てた激越な抗議です。それは無知と粗暴によって構築された不正、抑圧、悪の複雑な制度に依る支配的価値の破壊者です。そして人間対人間、人間対社会の基本的関係の変容を導く、**新価値**の先駆者なのです。だから何かの記念的悪を補填する改善者ではなく、形式や制度の更新などではなく、まして社会的福祉の再分配者に終るのではない。それだけでなく、もっとそれ以上のものである。それは第一にそして斬新な**「価値変換者」**新価値の担当者です。**新しい倫理**の偉大な教師、人生の新觀念と社会関係におけるその示現を人に吹きこむ者です。それこそ心の、精神の再生者なのだ。

その倫理的教訓の第一は、使用する手段と目的は一致することです。すべての革命的社會変革の究極目標は、人生の厳粛なこと、人間の尊厳、自由と幸福に宛てたすべての人の権利、を設定することです。これが革命に必須の目的とならない限り、激烈な社會変革は決して正当化されないのだ。なぜなら、外部的社会変革は、正常な進化過程で達成されたし、達成できるのです。

これに反して、革命は**外部変革**だけでなく、**内部**の、基本的、基盤の変革です。概念と理念の内部変革が、社会の各層に広く波及して、遂に革命として熟知されている激烈な動乱へと昇りつめるのです。その頂点で価値変換の過程を逆倒したり、むきかえるとか、裏切れるのですか？ ロシアではそれが起きたのだ。そうではなくて、革命はそれ自体が、その集積されたものの実現過程を速め、遂行しなければならぬ。その責務は、鼓吹して頂点へ押しあげ、実現にあたっての十分な分野を与えるこ

とです。こうして初めて革命は実現するのです。

それを實地に適用すると、本当の革命期、いわゆる過渡期とは、新社会条件の前駆、導入期です。新生の國、人間と人類の新居の國である。それが新しい生の精神、新事態の構築に調和するのでなければいけないのです。

今日は明日の親である。現在は未来の彼方にまで影を落している。それが生の法則、個人と社会の法則です。倫理的価値を剥ぎとった革命は、不正、欺き、抑圧を、未来社会の基礎にする。未来を作るのに使用する手段が、その礎石です。ロシアの悲惨な状態を看よ！ 国家の中央集権的立法が、個人の主導性と努力を麻痺させた。独裁の横暴が民衆を奴隸的服従へとおびえさせ、組織されたテロは、大衆を墮落させ、暴行を加え、個人的熱望をことごとく硬直化させてしまった。その上制度化した殺人が人命を輕視し、人間の尊嚴の知覚と生の価値をまつ殺して、何をするにもつきまとう強制により努力は辛く、労働は処罰とするため、人間存在はすっかり相互欺瞞の網の目となり、最低で最も粗野な人間の本能をよみがえらせたのです。これは自由と友愛の新生を、始めるにあたっての不幸な遺産である。

革命は、その究極の理想によって鼓吹されない限り無駄であると、強調しなければならない。革命の方法は革命の目的に一致しなければならない。革命を前進させる手段は、その目標に調和すべきである。つづめて言えば、革命が新社会の中で設定しようとする倫理的価値は、いわゆる過渡期の革命活動において着手されなければいけない。それでこそ、その活動は、達成しようとする生として、現在の同じ素材から作られるとき、そのよりよい生への真実なかけがえのない橋渡しをするのです。革命は来たるべき時の鏡。明日の大人となるべき子供なのです。

ドキュメント